
そらごよみ

佐野介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そらいろよみ

【Z-コード】

Z5603C

【作者名】

佐野介

【あらすじ】

普通の高校生の天道暁。しかし、普通じゃない現実が彼を待っていた。

1・意氣投合

まるで念佛のような長話。ステージに立つて話をするんだから、もう少し聞いてもらう努力をしろよ、と思いながら天道暁は欠伸を噛み殺した。

ここは、広磨高校。よくある私立高校だ。そして、現在記念すべき入学式の真っ最中。…だというのに。校長の念佛のおかげで、暁の気分は急降下していた。体育館の淀んだ空気のせいもあつただろう。

リストでも乱入したら念佛もこの退屈な気分も吹き飛ぶだろう。リスト、乱入してこないかな、と適当な事を考えていると、すぐ近くで欠伸を噛み殺す音がした。何気なく音がした方向、右を見る。

そこには、未だ念佛を唱えている校長をけだるそうに見る少年がいた。髪は綺麗なブラウンで、前髪は頬まで、後ろ髪は背中まで伸びている。男にしてはちょっと長い。制服を微妙に着くずしていく、それがとてもセンスがいいと感じた。精悍な顔立ちで、これは女子にモテそうなタイプだ。羨ましい。

観察していると、急にはつとした表情になり、真剣な顔で校長を見つめだした。何をそんなに熱心に見つめているんだろうと不思議に思い、暁も校長を見つめてみる。何か変わったことでもあるのだろうか。全くわからない。相変わらず油性のテカつた顔で、念佛を唱えている。

と、不意に少年が呟いた。

「あの校長…」

暁は誰に話し掛けたのかを確認するため、少年を横目で見た。しかし、少年は誰に話し掛けたというわけでもなさそうだった。少年はそれから口をつぐんだ。

「あの校長が、何?」

暁は焦らされて、先を促した。少年はちらりとこちらを見ると、

また視線を戻し真剣になつた。

「…ビーバーに似てねえか？」

ビーバー、ああ、前にテレビで見た事があるな…と想像する。その想像と校長の顔が見事にダブリ、思わず吹き出して笑い転げそうになつた。ビーバーに丸眼鏡を掛けると、そつくりなのだ。暁は笑わないように、必死に耐えた。思わず笑い転げたりすると、少なくとも200人の前で恥を晒すことになる。それだけは絶対に避けたい。腹を強く押さえつけ、何とか我慢する事に成功した。腹筋がかなり痛み、過呼吸になる。少年は声を出さずに笑つた。

「やつぱり、そつくりだよな」

「そつくりどころか、あれはどこからどう見てもビーバーだろ…」それから少しの間、2人で息をひそめて笑い合つた。暁が涙を流しそうになつていていた時、少年は手を差し出した。

「俺、蒼地^{そうち}槇^{まきみ}巳。お前は？」

暁も手を差し出す。

「僕は天道暁。宜しく」

縮こまつて握手を交わす。まだ少ししか話していなかつたが、槇巳とは巧くやつていける予感がしていた。

唐突に念佛が終わつた。周りの人が起立しているのに気付き、2人は慌てて立ち上がる。揃つて礼をする。しかし、顔は半笑いだ。ビーバーの顔が忘れられない。

それから暁は、校長とビーバーを見ると笑わずにいられなくなつた。

よく晴れた曇下がりの午後。2人は喫茶店の喧騒の中にいた。一番奥の、片隅にある席。昼時だつたせいか、そこしか空いていなかつた。空いてるだけでも運がいいと思うべきなのだろうか。

「まさか、入学初日から友達が出来るとは思わなかつた」暁はメロンソーダをすすりながら言つた。金が無いので、これで出来るだけ保たせないといけない。少しずつ、ちびちびと飲んでい

く。

「俺も」

田の前の席に座っている楳巳は、パスタをラーメンのように豪快にすすって食べている。田中そだなあ、と眺めながらメロンソーダをすする。

同級生達の中でのビーバーが校長の高校を選んだのは、暁だけだった。だから少し不安だったのだが、これなら楽しく青春が送れそうだ。

楳巳はパスタを食べ終えると水を飲み干し、合掌した。暁はその様子に少なからず驚いた。不良っぽい見た目からして、そういうことは一切しないという偏見をもつっていたからだ。

「…楳巳って意外と礼儀正しいんだな」

頬杖をついて、メロンソーダをすする。楳巳は背もたれにもたれかかっていた。

「何それ、見た目？」

「あ、いや、そうじや…」

怒らせてしまったかと急いで否定したが、それは楳巳の快活な笑い声で遮られた。

「別にいいよ。俺の髪な、これ、地毛なんだ」

「え、楳巳ってハーフ？」

「違うよ」

「へえー…」

知らぬ間に身を乗り出し、凝視してしまう。日本人でそういう髪色のやつがいるとは思わなかつた。茶色っぽいのなら見た事ある。しかし、楳巳は鮮やかな、ライトブラウンなのだ。まるで、アメリカ人か誰かの子供のようだ。

「赤ん坊の頃の写真でも見せてやるうか？ 正真正銘の生まれつきだよ」

「うん、今度見せてくれ」

暁はまだ半分以上残っているメロンソーダをすすり、また話を再

開させた。

「ところで、楳巳の家ってどうへ？」

「高森」

「近いね。僕は伊崎」

高森のすぐ隣が伊崎で、その近くにここ、左結海さゆみがある。

2人とも電車通学で、乗る路線も同じようだつた。明日は電車の中で再会することを約束し、今日のところは解散になつた。広磨高校を選んで良かった。暁は、心からそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5603c/>

そらごよみ

2010年10月12日08時08分発行